

## 第1章 イントネーション研究の方向性を探る

第1章ではイントネーション研究の歴史をふりかえるとともにイントネーションの諸定義、類型方法を見直し、談話レベルでのイントネーション研究、「話調」研究の必要性を明らかにする。そしてその一事例研究として、いわゆる「尻上がり」イントネーションに焦点を当てる意義を述べる。その上で本研究のめざす各種談話におけるイントネーションを中心とした韻律構造の解明のための方法論を概説し、言語学史上における本研究の位置付けを行う。

1-1ではイントネーションの研究史を概観する。1-2ではイントネーションの定義をめぐる議論から、イントネーションとは何か改めて考え、1-3では従来のイントネーション類型と本研究における類型との比較を試み、イントネーション研究の問題点を明らかにする。さらに1-4では談話研究と韻律研究の接点としての「話調」研究の意義について考える。そして、「話調」研究の一端として、いわゆる「尻上がり」イントネーションを研究する意義を述べる。「話調」という言葉は、1-1-1などでも言及するように寺川(1945, 1951)によるが、本研究における「話調」の定義及び、詳細は1-4-3で明らかにする。1-5では本研究の方法論について概説する。1-6では第1章のまとめとして、本研究の言語学史上における位置付けと今後の課題について述べる。

### 1-1. 日本語イントネーション研究の歴史

ここでは日本語のイントネーション研究史を私見により3つの時期に分け、それぞれの特徴について概観し、今後のイントネーション研究の向かうべき方向を検討する足がかりとする。ここでは、研究動向から第1期(およそ1950年以前)のあまりイントネーション研究が盛んでなかった時期、第2期(1950年頃から1980年頃)のイントネーション研究の重要性が広く認知されるようになった時期、第3期(1980年頃以降)の音声分析ソフトの普及に伴うイントネーション研究の多角化、精緻化の時期の3期に分けた。各時期の境界は絶対的なものでもなければ、明確なものでもない非常に大まかなものであることは断るまでもないだろう。

#### 1-1-1. 第1期: イントネーション研究前史(～1950年代以前)

この時期は日本ではイントネーションに対する関心が薄く、イントネーション研究がほとんどなされなかった時期だと言える。

言語研究の近代化が主に書き言葉の文法記述というかたちで始まった日本語研究において、話し

言葉にしか現れないイントネーションの研究が他の分野に比べスタートが遅れたとしても不思議なことではない。また、より小さい単位からより大きな単位へと分析対象を広げていく構造主義的アプローチの影響や、いわゆる「ラング」(ソシユール1980)重視の傾向もイントネーション研究の出遅れと無関係ではなかつただろう。

Cruttenden(1997)によれば、英語においても近代的、体系的イントネーション分析は20世紀初頭の Jones, D.(1909a, 1909b, 1918)やPalmer(1922)、Pike(1945)の登場をまたなければならなかつたものの、すでに16,7世紀の発音マニュアルにイントネーションについての記述が見られるという。そして18,19世紀にはパブリックスピーキングに関する演説・弁論マニュアル(Walker1781, 1787, Rush1833)でも扱われるようになったということである。このような市民(政治)生活における演説、つまり音声言語の重要性の高さがイントネーションに対する関心を比較的早期に招来した一因であろう。また、竹林(1996, p.421)が「特に英語のような強勢アクセントを使用する言語においては日本語のようなピッチアクセントの言語より、感情や情報の伝達においてイントネーションの活躍する場ははるかに大きくかつ複雑で英語独自の特徴を持っている。」と指摘するように、より複雑なイントネーションを持つ英語を母語以外の話し言葉として必要とする人口の増加もその研究を推し進める一助となつたものと考えられる。

一方、日本においても音声言語、話し言葉に関心がなかつたわけではない。特に日本語の発音(アクセント)の統一という問題に関心を持った寺川喜四男や石黒魯平は早くからアクセント以外の音調にも関心を寄せた。寺川(1948, 1951)は、アクセントが語に固定しているのに対して文末イントネーション(「語調」と呼んだ)が「浮動的なものであつて必ずしも固定してゐないと見られ」、「多少の相違はあるが、各言語・各方言に共通したものが多く認められる」ものと考え、これを重視することはなかつた。しかし一方で「各言語・各方言に社会的傾向として固有せる、會話に於ける自然的抑揚・音律」を「話調」(強さに関しては「話勢」と呼び、この「話調」が語アクセントの基底をなしていると考え、「話調」の違いとその交流によって「今日見る如き相對立する東方系統・近畿系統の二大音調流を生ぜしめたのではないであらうか」との考えを示した。そして、「発音統一」やアクセント教育についてはこの「話調」の練習を最も重視すべきであると主張した。また日本語の「統一」について考察した石黒(1950)は、「Accentの統一」と言つても、「事實必要なわ音調全體の統一」であり、単語音調のみの研究では「國語音調統一の實際教化運動」を担うことはできないと考えた。この背景には「實際上、語 accent が文 accent あつてのものであり、文 accent が語 accent の坐である」(石黒 1950)との考えがあつた。そして「單語の accent の眞の理解わ文音調をはなれてわ出來ない」(石黒 1950)と考え、文の音調(文 accent)の研究の重要性を訴えたのである。

しかし当時は話し言葉という点、概して「標準語」や敬語などの用語のほうにより関心が高かつた

ようである。実際、「方言札」を使つての標準語普及政策でもアクセント、イントネーションにまでは注意が払われなかつたし、植民地における日本語教育でも同様であつた。この点に関しては寺川(1942, p.138)が台湾における当時の「国語教育」について「今日では階級の如何を問はず本島人の大部分がどうにか國語を話すやうになつたが、残念なことにはアクセント教育といふことが行なはれてゐない・・・」と指摘している。

英語、米語のイントネーションの科学的な分析が本格化した20世紀前半、日本ではイントネーションは人間一般の共通の心理による普遍的な現象であり、語アクセントのような社会的規則、いわゆるラングではないとの考え(Wundt 1912、ヴント 1959、有坂 1940)があつた。それも「ラング」中心に研究が進められた当時であつてイントネーション研究が進まなかつた一因だと考えられている(寺川 1951、奈良 1972)。イントネーションの社会性、個別性を指摘するもの(服部 1951、石黒 1943、寺川 1945)のなかにも、(特に文末の)イントネーションが話者の心理状態を示すもので各言語、各方言に共通していると考えられるものが多かつた。具体的、実証的な研究が行われなかつたのも、このような先入観とも言えるイントネーション観にその一因があつたものと考えられる。さらに実際の音声の観察に不可欠な機材が十分でなかつたことも、音声の研究がほとんど語アクセントの研究に限定された要因であらう。

先に述べたように、石黒(1950)や寺川(1951)のように語アクセント以外の音調の研究について、その重要性を指摘するものも散見できるが、服部(1933, p.5)が「文全體の聲の高低を意味するのはジョウンズ氏 D. Jones 等の云う 'intonation' と云う語である。遺憾乍らこの語の譯が一定してゐない。」と指摘するように、英語の intonation の訳語も様々であり、「イントネーション」、「文音調」、「話調」、「言葉調子」などの言葉が指すものも研究者ごとに様々だつた点を考えると、第1期ではイントネーションが言語研究の課題として十分認識されていたとは言えないだろう。

### 1-1-2. 第2期: イントネーションの音韻論に向けて (1950年代～1980年代)

第2期は日本におけるイントネーション研究が本格的に始まつた時期と言える。金田一春彦の「ことばの旋律」(1951)以後、イントネーションとは何かという議論から実際の話し言葉におけるイントネーションの実証研究が本格化した。後のイントネーション研究に大きな影響を与えた諸研究がなされた時期である。現在のイントネーション研究は、主に文末のイントネーションとその表現意図や意味に語用論的な関心を向けるものと、統語構造とイントネーションの関係に焦点を当てるものに大別できる。この時期は前者のアプローチが中心的であつた。

第1期では intonation の訳語さえ一定せず、イントネーションとは何かという問題にも明確な答えが

出されていなかった。第2期、イントネーション研究は「イントネーションとは何か」をめぐる議論から始まったと言えるだろう。なかでもアクセントとの区別という点が意識され、特に宮地(1961、1963)はイントネーションとアクセントの区別を意識的に明確にしようと試みた。その背景には「準アクセント」(神保格1925)や「文節連合(もと下傍点)のアクセント」(宮地1961)と呼ばれるような連語における後続語のアクセントの実現をめぐる議論があったことを指摘しなければならない。

そもそも「準アクセント」は神保(1925)の用語で、語が連続した場合に後続語の語アクセントの実現のされ方が単独で発話された場合とは異なって、はっきり実現されない現象を指した。例えば、「牛が」と「います」は単独で発話される場合、それぞれ「低高高」、「低高低」パターンだが、「牛がいます」と続けて言う場合の音調パターンは必ずしも「低高高低高低」にはならず、「低高高高高低」となることがあり、また「犬がいます」という場合も、同様に「低高低低高低」ではなく「低高低低低低」となることがある(神保(1925)は前者を甲、後者を乙としている)。神保(1925、p.188)はこのような語が連結したときに限って現れる、「その連結に半ば(「半ば」にもと傍白点\*筆者注)固定的なものを「強ひて名づければ連語の「準アクセント」とでも云ふべきであらう。」と述べている。このような現象については、佐久間(1929)や服部(1949)に見られるように、従来はアクセントの問題に付随する問題として捉えられていた。

しかし近年、郡(1992、1997)はこれらの音声の違いをピッチパターンで明示しつつ、イントネーションの問題として、これらの「アクセントの弱化」がどのような条件で起こるかの規則について実証的に論じるに至った。ピッチアクセントを持つ日本語においては、イントネーションとは何かを問う以前に、服部(1949)のようなアクセントとは何かという問題やその単位をめぐる議論の延長上にあつた宮地(1961)に見られるようなアクセントとイントネーションの「ふりわけ」の問題が非常に大きな関心事であつたことは当然とも言えるだろう。

最終的に宮地(1961)は「文節アクセント(の連続)プラス判断情意を表現する音調」が「文の基本的音調」であるとの考えを示した。そして「「文の基本的音調」は、その幹としてのアクセントの形(注1)にしたがうイントネーションと、その根としての意図表現のイントネーションとの合一で構成される。」とし、前者を「アクセント的イントネーション」、後者を「表現意図イントネーション」と呼んだ。さらに、この「文の基本的音調」に加えられて、「冷静かつ無表情ではないことを表わす音調」を「卓立表現イントネーション」と呼び、これらを繰り返す音調である「装飾表現イントネーション」と併せて「文の曲調的音調」とした。つまり、それぞれは以下のような関係になっていると考えられる。

文の基本的音調 = アクセント的イントネーション+表現意図イントネーション

文の曲調的音調 = 卓立表現イントネーション+装飾表現イントネーション

そして、宮地(1961)はそれらが比喩的に以下のような「イレコ型」の構造をなしていると考えた。

[ [ [ アクセント連続 ] 文の基本的音調 ] 文の曲調的音調 ]

宮地(1961)が指摘するように「一般に俗称として用いられる「イントネーション」ということばは、この曲調的音調のほうを指すことが多い」なかで、上記のようにイントネーションを幅広く捉えた点は評価されるべきであろう。

また川上(1956b)は「従来、非弁別的ではあるがやはりアクセントの型の一つの特徴であると解されていた第一モーラ直後の上昇は、私見によれば文音調の一つの型たる「並上り型」の現れである」と指摘した。さらに川上(1956b)は、現実の発話に現れる文頭、句頭の文音調の型として「遅上り」、「早上り」があることも指摘している。ただし、このような東京語の頭高型アクセント以外の語に見られる第1モーラから第2モーラへの上昇については、郡(1997)のように「句頭」だけに現れる特徴であるとか、アクセントの特徴でないとは考えない。」とする立場、つまりイントネーション(だけ)によるものでないという見解もある。

しかし、この時期はイントネーションと言え、概して金田一(1951)、国立国語研究所(1955)、秋永(1966)などに見られるように、話者の発話意図を端的に表す文(句)末のイントネーションに限られていたと言える。これはアクセントとの区別が意識された結果であり、アクセントと紛れることがなく、分析する上で扱いやすかったためだと考えられる。

このようにアクセントによる音調との区別を明らかにし、イントネーションによる音調を文末などの「部分」に絞ったことによって実証研究への道が拓かれたと言ってもいいだろう。その先鞭をとったのは、国立国語研究所の実証的な諸調査研究である。ここで扱われるテキストはすべて実際の話言葉であり、イントネーションは特に文末、句末のものが重要とされ、表現意図とそれらの型の関係を明らかにしようとするものだった。国立国語研究所(1955)は、句末と文末イントネーションの音調を高い方から順に1から4の数字で表し、その音調を上昇、下降などの方向別に6タイプに分類し、それぞれの現れ方について性別、年齢、教養(学歴)との関係を明らかにした。また、同一人のイントネーションの場面差やニュース解説と日常談話との相違についても言及するなど、社会言語学的視点からの検討がなされていることは特筆に値するだろう。さらに吉沢(1960)では、文末のイントネーションについて、「平調」、「昇調1」、「昇調2」、「降調」に、特殊なものとして「@型類」を加えた5種に分類し、表現意図と文末形式の関係を探った。脚本をもとにした俳優の音声を音声分析機で分析したもので、「演ぜられた」会話としての限界を指摘しつつも、イントネーションの貴重な基礎的研究となった。このような研究を基礎に、イントネーションの型と表現意図に関する研究は、

文末、文頭だけでなく、文中におけるプロミネンス現象についても目が向けられるようになった(川上1957、1961、宮地1963、大石1959、和田1982)。

これらの実証的研究は、主に文末イントネーションやプロミネンスの音声的実態と発話意図との関係の解明に大きく貢献した。実際の話し言葉にあらわれる多様で複雑な音調のうち、イントネーションを文(句)末などの「部分」に限定することで、イントネーションの「型」をある程度抽出し表現意図との関係を探った点は評価される。しかしイントネーションが「文」レベルの音調であるとの共通認識がありながら、「文」全体が扱われることはほとんどなかった。

これに対し、奈良(1958、1972)は、統語構造とイントネーションの関係に着目し、抽象的で非常に単純化されてはいるが、文全体のイントネーションの音韻論的分析、記述を試みた。具体的には、「発話段落」全体を統合する「音調素(イントネーム)」を仮定し、実際の発話の頭部や末尾の音変動は、その型によってもたらされると考え、この「音調素(イントネーム)」を設定することで、東京語の語頭の上昇を「休止音素」のようなものを仮定せずに示すことができる上、同形文の統語関係の相違も示すことができると考えたのである。

この時期は奈良のような視点からのアプローチは非常に稀であった。後にこのような統語構造との関係からイントネーションを論じる研究は、Goldsmith(1976、1990)、Lieberman(1975)、Pierrehumbert(1980)らの自律分節理論(Autosegmental-metrical Theory)の影響を受け、日本語についても後述する第3期に大きく発展する。しかし第2期のイントネーション研究の特徴は、やはり文末の音調の型や文中のプロミネンスなど、部分的なイントネーションの詳細な観察(というよりは「聴察」と記述の充実にあつたと言えるだろう。ただしその際、対象となるイントネーションの機械による音声分析も多少行われてはいたが、内省に基づく主観的な判断が中心的であり、十分な客観性が得られたかについては問題がないとは言えない。定義と同様、統一的な記述方法や分類方法の確立には至らなかった。

### 1-1-3. 第3期:「目」による音声学的アプローチ(1980年代～)

1980年代はいわゆるバブル経済が日本語学習者の大幅増加をもたらし、かつてないほどに日本語への関心が高まり、日本(語)の「国際化」が声高に叫ばれた時期である。特に話し言葉として、コミュニケーションの手段として非母語である日本語を必要とする学習者の急増は、日本語の音声面の研究を加速させた。1989年から文部省(現文部科学省)の重点領域研究として「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」(研究代表者杉藤美代子)が行われ、イントネーション研究に関しても多大な成果があがった。これを支えたのが音声分析・合成ソフトの普及であろう。パ

ソコンの普及に伴い各種の分析ソフトの利用が簡便になったため、音声を「見る」ことが容易になった。現在、話し言葉の音声を扱う多く言語学者、音声学者はこれらの恩恵に浴している。この背景には、理工系、情報通信系の研究者間での合成音声の実用化や人工対話システムに対する関心の高まりがあったことを看過することはできない。

生理学、物理学、工学などの理科系分野での各種の言語研究(藤崎1989a、b、廣瀬1997、佐藤1997、桐谷1997、白井1998など)なくしては、現在のイントネーション研究の成果はなかっただろう。特に、発声のメカニズムにおける生理学的、物理学的特徴から導き出されたフレーズ成分、アクセント成分の関数として発話の基本周波数パターンを表す藤崎モデルは、日本語の諸方言のみならず、英語・エストニア語など系統の異なる種々の言語の単語および音声の基本周波数パターンについてもよく適合し、中国語においても、若干の指令を追加設定することで単語や文の音声の基本周波数パターンにも適合するという(藤崎1989a、b、1987)すぐれた自然言語の韻律モデルである。これらの研究が今日の音声言語研究の発展の基礎を築いたと言っても過言ではない。このような学際化の傾向はこの時期の一つ特徴でもある。音声対話システムにおける自然な対話の実現を目指した市川ら(1996)の諸研究(注2)はその好例であり注目すべきものと言える。

しかし、この第3期の最大の特徴は、日本語の国際化に伴う外(外国語)からの「目」とハード面での技術革新がもたらした音声分析ソフトという「目」による分析の精緻化と客観化にある。最たる例が日本語教育における水谷修他(1991、1992)、鮎澤他(1991)、鮎澤(1992)の研究であろう。これらの研究は様々な母語を持つ日本語学習者の日本語に見られる韻律上の母語の影響をピッチパターンに示し、母語による日本語の韻律への干渉の様子を実証的に明らかにしたものである。また、例えば疑問の上昇と言っても、母語が異なれば必ずしも同じパターンにはならないことについては、以前から有坂(1940)が指摘していたが、それを目に見える形で示したことは、イントネーション研究のみならずイントネーション教育にとっても画期的だと言える。

このようなイントネーションの「視覚化」とそれに伴う客観化の影響は方言の音調記述にも及んだ。方言研究の分野では早くから「話調」あるいは「文アクセント」などとして、発話全体の音調、イントネーションに注目することの重要性が唱えられていた(藤原1962、1969、1994)ものの、調査者が聞き取った音調を傍線などによって表記するという方法が主流で、客観性と精密さに欠けるきらいがあった。しかし、この点も録音技術の改良に加え音声分析ソフトの普及により、容易にピッチパターンを示すことができるようになり、大きく改善された。

さらにこのような音声分析ソフトの普及とともに、Goldsmith(1976、1990)、Leben(1976)、Lieberman(1975)、Pierrehumbert(1980)らの影響を受け、奈良(1958、1972)や原口(1980、1994、注3)に見られるような統語構造と韻律に関する抽象的な議論が、音声の実態に照らしてより具体的、実証的に

論じられるようになった。日本語に関して、Pierrehumbert & Beckman(1988)が「カタセシス(catathesis)」と呼び、窪菌(1988, 1995, 1997)が「ダウンステップ(downstep)」と呼んだ、いくつかの語が連続するとき、平板型アクセントの語の連続においては見られないが、起伏型アクセントを持つ語において見られる急激な音調下降現象や郡(1989, 1992, 1997)が「アクセントの弱化」と呼び、かつて「準アクセント」などと呼ばれアクセントの問題に付随して論じられた現象をも含む統語構造、情報構造とイントネーションの関係についての精緻な実証研究は、これらの音声分析機なしには不可能だったと考えられる。

さらに音声分析・合成ソフトによる合成音声を利用した実験的手法により、イントネーションと統語構造に関する研究(前川1990, 1992, 1997a)、統語的あいまい文理解に果たす韻律の働きに関する研究(東1992, 1993)、談話におけるポーズとイントネーションの機能に関する研究(杉藤1989)、発話の丁寧さの知覚に及ぼす韻律の影響に関する研究(前川他1997, 吉岡2002)などがなされ、より広範にわたる発話の理解や印象に関わる音響的な因子を個別に割り出すことが可能になった。

このように音声分析ソフトの普及により、イントネーションが文末やプロミネンスだけでなく、発話文全体についても正確かつ客観的に捉えられるようになった。また外国語のイントネーションとの対照が視覚的にも可能になった。しかし一方で日本語においては、上野(2002)が指摘するように、「特に「文末イントネーション」は長い研究歴を持つ標準語においても共通の理解に達していない。一体いくつかの型があり、それぞれの意味が何であるのか、否、そもそも常に離散的なのかさえ十分にはわかっていない。」のが現状である。また一文内の統語構造、句構造とイントネーションの関係については先のPierrehumbert & Beckman(1988)、窪菌(1988, 1997)らにより解明が進んだが、英語におけるBrazil(1975, 1978, 1985a, b)、Coulthard(1992)などのような談話においてイントネーションを扱った研究は日本語ではまだ例がない。これらの点は今後のイントネーション研究の主要な課題となるだろう。

ところでBrown, G. & Yule, G. (1983)は言語の機能についてtransactionalな視点、つまり本質的に情報を伝達するために使われる側面と、interactionalな視点、すなわち交感的(phatic)な側面を対比して挙げた(注4)。今後、日本語のイントネーション研究においては後者におけるイントネーション研究の進展が一層望まれると考えられる。

第2、第3期を通じて日本語では、イントネーションの型や、イントネーションと発話意図、統語構造との関係、文理解に対するイントネーションの影響など、どちらかと言えばtransactionalな面の解明に重点が置かれてきた。また、それらについては言語(方言)間の対照研究への道も開かれ、音声的記述の客観性や精度は格段に高まった。しかしよりinteractionalな視点からの研究、つまりイントネーションの場面差や使用者の社会的属性との関連を扱った社会言語学的研究は、まだ緒に付いた



ばかりである。

数少ない例だが、井上(1994, 1997)は、「それでえ、だからあ」の下線部のように文節末拍を伸ばす上昇下降調のイントネーション、いわゆる「尻上がり」イントネーションを取り上げ、社会言語学的に位置付けた。井上(1994, 1997)は、使用者の社会的心理的屬性や語感、場面による使い分けの実態などを明らかにしつつ、その談話機能に着目し、進行中の言語変化として「新方言」に関連付けてその発生原因や普及のメカニズムを探った。また原(1992, 1993a)は多くの一般人を対象に、このイントネーションの印象や、使用場面を問う聞き取り調査を行い、さらに原(1994a, b)は、いわゆる北関東の方言音調である「尻上がり調子」との受容の年代差などを明らかにし、当該イントネーションの音響的特徴を明らかにするべく合成音声を用いた聴取実験を行った(原1993b)。この他、新しい現象として「半クエスション」や「擬似疑問」と呼ばれる非文末の上昇イントネーションを扱った研究(齋藤1999a, b)や、敬語行動との関連で「丁寧さ」と韻律の関係を扱った研究(荻野ら1991, 1992)など従来のイントネーション研究にない新しい視座を持つ研究も散見できる。

談話における情報構造との関連、社会言語学的視座からのイントネーション研究は今後さらに進められるべき課題の一つである。すでに、文法研究では談話の文法を扱うものもあり、社会学(エスノメソドロジー)における「会話分析」の手法が言語研究にも取り入れられている。小さな単位から大きな単位へと進められてきた言語研究全体の流れから考えて、イントネーション研究においても「談話」を無視しえない時期が来ていると言えるだろう。

## 1-2. イントネーションの定義をめぐって

前節ではイントネーションの研究史を概観した。ここでは各時期のイントネーションの定義を概観し、その変遷をたどる。はじめにイントネーションとは何かを考える一つの端緒として各種辞典を参考に一般的なイントネーションの定義を確認する。その上で前節のイントネーション研究史に沿って先達諸氏のイントネーション観がどのように変化してきたか明らかにし、改めてイントネーションとは何かを検討する。

### 1-2-1. 一般的なイントネーションの定義

ここでは一般的にイントネーションという場合、言語音声のどの部分を指すのか、そしてその基本的な機能とは何かについて確認する。はじめに以下の<1>から<4>の辞典の記述を見てみよう。